反天皇制運動
Alert
27号
［通巻409号］
2018年
9月4日発行
第Ⅴ期・反天皇制運動連絡会

今月のAlert
◉天皇「代替わり」をめぐる活発な動き「明治150年」反対の行動にも参加を！――＊2
反天ジャーナル◉――宗像充、よこやまみちふみ、なかもりけいこ＊3
状況批評◉天皇の人権――中山千夏＊4
書評◉『明治日本の産業革命遺産・強制労働Q&A』――梶川涼子＊7
◉『母の憶い、大待宵草――よき人々との出会い』――蝙蝠＊8
太田昌国のみたび夢は夜ひらく〈100〉
◉百年後のロシア革命――極秘文書の公開から見えてくるもの――太田昌国＊9
マスコミじかけの天皇制〈26〉
◉「平成」最後の「全国戦没者追悼式」の〈オコトバ〉――〈壊憲天皇明仁〉その24――天野恵一＊10
野次馬日誌＊11　**集会の真相**＊14　**学習会報告**＊17
反天日誌＊17　**集会情報**＊17

「あなた、国民ですか？」と二十歳前後と思える若い女性は私に問うた。本紙「集会の真相」にも報告している「元号はいらない署名」の、新宿アルタ前街頭情宣を友人たちと楽しくやっていた時のことだ。この一言を言いたくて声をかけてきた人だろう。どのようにしても通じ合えないように思える時間だった。それとも、どこかに回路はあるのだろうか……。

誰もが感じているだろう元号の「不便、不自由、不合理」と、天皇の年号を使うことの問題を伝えようとするも、むなしく終わる。平行線のままで対話とはいえない。歴史認識の大きなズレ。苛立つほどの天皇信奉者。反天の行動で私たちを攻撃する人たちと主張は変わらない。ねじ曲げられた「歴史の真実」なるものが厖大に発信されている、妄想の世界を知識の源とする人たちだろう。

しかし、その同じ場所でまた違う人たちとも出逢う。「なぜ反対するのか」と問われ、同様に応えていると、私も天皇制に反対だから、といって署名してくれる人。通りの脇にずっと座っていた男性は、友人たちのスピーチに耳を傾けていたらしい。おもむろに起ち上り近寄ってきて、サラサラと署名してまた同じ場所に座った。たった二時間のアルタ前。この狭い空間で、いろんな人に遭遇できる、ということも実感できた。まあ、そんなに世の中大きくは変わっていないのかも……。

私がとても若かったころ、集会やデモのあと、会場を離れて一人歩いているときによく不思議な気分に襲われた。さっきまでいた小さな社会と、いま歩いているリアル社会が異次元であるかのような錯覚だ。しかし実際はそうではなくて、リアル社会に私たちもあの人たちも、いろんな人たちがいる。だから、きっと回路はどこかに見つかるのだろうと、今はそう思ったりする。

（桜井大子）

250円
●定期購読をお願いします（送料共年間４０００円）
●郵便振替　00140-4-131988　落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A　淡路町事務所気付　落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460　URL http://hanten-2.blogspot.jp/　mail: hanten@ten-no.net
●最新情報はこちら▶ http://www.ten-no.net/

今月の Alert

天皇「代替わり」をめぐる活発な動き「明治150年」反対の行動にも参加を！

今年の8・15闘争も無事に終わった。ここ数年は、デモ隊にひんぱんに突入してくる街宣右翼とデモの参加者が、直接接触したりする場面は少なくなっている。もちろんそれはよいことだが、結局この日、この地域を警察が完全に制圧し、そのコントロールのもとでデモも動かざるをえない事態が現出していることの結果だとすれば、それはまったくよいことではない。右翼を利用して中立を装い介入する警察に対する原則的批判をなしつつ、本来の目的であるわれわれの意思を、どのように表現していくか、引き続き具体的に考えていかなければならない。

今年の「全国戦没者追悼式」は、予想に違わず、アキヒト最後の式典出席として、マスメディアによってその「平和への思い」が強調された。「おことば」の大枠は変わることはなかったが、「戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ」という一節が新たに加えられたことに注目する報道が目についた。ここではひとことだけ、「戦後の平和」とは日米安保体制と冷戦の一方への積極的加担によってはじめてなされたという意味で、「戦争」に対立するものでは決してなかったとだけ言っておこう。

天皇の戦争責任問題ということでは、共同通信が入手した、昭和天皇の侍従であった小林忍の日記にもふれないわけにはいかない。そこではヒロヒトが、一九八七年四月に「細く長く生きても仕方がない。……戦争責任のことをいわれる」と発言したと記されていた。これは、戦争責任のことをいつまでも言われるのは嫌だ、という心情を吐露したと読むのが普通だろう。しかし半藤一利は「細く長く生きても仕方がない、というのはすごい言葉だ。びっくりした。昭和天皇の心の中に最後まで戦争責任があったのだと分かる」などと、保阪正康との対談で述べている（八月二三日、共同配信記事）。

ただ、ここでふれたいことはそれではなく、自分も参列した天皇「代替わり」儀式について、その費用も含めて「ちぐはぐな舞台装置」などと小林が批判を加えていたことだ。政府は来年の「即位・大嘗祭」を「前例を踏襲」して行うとすでに発表しているが、「今回明らかになった小林氏の見解が一石を投じる可能性もある」などとする報道もある。

さらにその直後、秋篠宮が、「大嘗祭」への公費支出という政府方針に対して、「皇室祭祀に公費を支出することは避けるべきではないか」との懸念を宮内庁幹部に伝えていたと報じられた（八月二五日、毎日新聞）。一連の「代替わり」儀式の中でも「大嘗祭」は純然たる宗教儀式であるので「政教分離違反」という批判が多い。

ここには、「代替わり」儀式に関しては、少しでも批判を回避して「国民全体の慶事」として挙行していくべきだという「合理的」な政治判断が反映しているだろう。もちろん、政府の方針はそうではないし、前回のように、政府や右派勢力などの間で意見が割れているような状況でもない。この「合理性」も、結局は「国民的議論」に基づいた「代替わり」を、という、「リベラル層」をも含めた主張を補強するものでしかないのだ。「即位・大嘗祭」に関しては、それらの儀式に対する税金支出の差し止めを求める訴訟が準備されており、私たちもそれに協力している。その詳細はおそらく次号で明らかにできると思う。

そして最後に。八月一〇日、政府は永田町の憲政記念館で、明治一五〇年記念式典を行うことを閣議決定した。この一年、全国各地で、多くの「明治一五〇年」企画が実施され、私たちもまた、2・11以降、「明治一五〇年」が天皇「代替わり」の前哨戦をなす攻撃であると位置づけて行動を積み重ねてきたが、「明治一五〇年」を祝賀する社会的な盛り上がりは正直言って実現していないと感じる。一九六八年の「明治一〇〇年」と比較してみれば一目瞭然だ。このときは日本武道館で政府式典が開かれているが、ハコとしての武道館が一万四〇〇〇人収容できるのに比べると、憲政記念館の講堂は五〇〇人に過ぎない。けれども、あの「主権回復の日」の政府式典が行われたのもこの場所であり、天皇を迎えて式典を行うことになんの不都合もないということだろう（ただし、いまのところ天皇が出席するという発表はなされていない）。

私たちは、式典前日の一〇月二二日の夜に、一日実行委員会を結成して反対デモを行いたいと考えている。詳細は確定次第お知らせします。ぜひ予定に入れておいて下さい。

（北野誉）

反天ジャーナル

結婚と単独親権

最近、別姓訴訟やLGBTの運動が活性化しているからか、事実婚や婚姻外パートナーシップ関係の法的保障の議論が賑やかだ。入籍＝法律婚が、相手との約束じゃなくて、実のところ国との約束だと気づくと、事実婚はいいようにも思える。でも子どもができると親権は片一方に限定されるので、関係が壊れた場合いったいどうするか。

ぼくは、事実婚での家庭生活の解消も経験しているので、その場合、「親権がない」ことが、いかに別居親や男性への差別を正当化する理屈に刷り替わるかを見てきた。事実婚の破たんと同時に相手に親権を主張された父親の相談も何件か受けたので、今の日本で事実婚（法律婚も）は男にはリスクが高すぎるとも思う。子どもの姓と親権を夫婦で分け合っても、別れる段になれば一方の親の片親排除という実力行使を防げない。

単独親権は戸籍の枠にはまらない家族関係を選別し、一方の親子関係を「内縁化」する。子どもに会えない親もつらいが、別居親が授業参観に行っても、「親権がないから」と教師たちに親が他人以下に扱われる差別を、子どもは日常的に味わっている。単独親権で守られているものは、ほんとは戸籍と男女平等の先送りだって気づいてる？

（宗像充／共同親権運動ネットワーク）

五輪ボランティア風刺サイト

二〇二〇年東京五輪・パラリンピックのボランティア募集を九月中旬に控える中、注目を浴びているのが、「東京五輪学生ボランティア応援団」というウェブサイトである。制作したのは早稲田大学の現役学生だという。その冒頭部分には「東京五輪組織委員会の皆さんは、私たち学生に、やりがい溢れるボランティアの機会を与えてくださろうとしています」とあり、一見すると東京五輪のボランティア募集を称揚するような内容である。

だが、読み進めていくうちに、ボランティアを称賛する言葉の数々は実は「皮肉」であり、痛烈な「風刺」になっていることがわかってくる。とくに、末尾部分が秀逸である。その一部を引用しよう。「私は、東京五輪まで2年と迫った今、もうすでに感動と興奮を抑えられません。1兆円以上もの予算を提示しながらボランティアにはたとえスキルがあろうが無かろうがびた一文出さない組織委の倹約精神、……どう考えても耐え難いであろう酷暑に対して打ち水で挑もうとする竹槍根性、……これらの要素が揃えば、美しい国・日本は世界に誇る自己犠牲の精神をもって最高の五輪を実現できるに違いないからです」。

この部分だけでも面白いが、全文の一読をおススメします。

（よこやま みちふみ）

安保法で変貌する自衛隊

二〇一八年度版防衛白書が出された。昨年九月の北朝鮮の核実験を受け「これまでにない重大かつ差し迫った脅威」と昨年より強い危機感を打ち出した。南北及び米朝首脳会談によって差し迫った危機は回避され、朝鮮半島の非核化へ向けた対話が進み始めているのに、白書はこの流れに逆行している。米国から売りつけられたイージス・アショア導入のために他ならないといわれている。表向きは非核化構想を評価し、PAC3の撤収やバカげた「弾道ミサイル避難訓練」を中止したが、日米軍事一体強化の思惑が透けて見える。

横須賀や厚木基地をウオッチングしている木元さんによると日米共同訓練の回数は増え、日英共同訓練やインド太平洋方面にまで出張っているとのこと。今年、横須賀基地にはイージス艦三隻が増強され、海自も新たにイージス艦二隻を建造予定だ。さらに横須賀長浦湾にある海自比与宇補給処をミサイル防衛用の弾薬庫に建て替えようとしている。島嶼防衛の名目で宮古島や奄美大島、与那国島に陸自のミサイル基地が建設された。またキャンプ座間の「中央即応集団司令部」が「日米共同部」に変わり、横田基地へのオスプレイ配備の決定など軍拡が止まらない。誰のための軍拡か！　戦争の記憶を忘れた民にはなりたくない。

（なかもりけいこ）

状況批評
思想・状況・批評

天皇の人権

中山千夏（作家）

ホームページ〔おんな組いのち〕の「アピール」欄に「天皇と憲法」と題する意見を寄せたのは、二〇〇五年だったか。天皇の後継者危機に直面した小泉内閣が「皇室典範に関する有識者会議」とかを設置し（〇四年）、女性天皇導入の是非が議論され、マスコミの話題になった。その議論を遠く見ていて辛抱たまらず口出しした投稿だった。

天皇について曲りなりに考え始めたのはハタチを過ぎてから。その後もマトモに考えることはなく、こと「女性」が絡んでやっと本腰入れて考え、まとまったのがこれで、その後、考えに大きな変化はない。

http://onnagumi.jp/ から「アピール」クリックで今も読めるけれど、まずは、その概要を。

〔私は知見が狭いので、あたかも誰も言わないから言う、みたいな口調でつい喋ってしまうけれど、これから述べる意見などは、たぶんすでにどなたかが古今東西で発表しておられるだろう。それでも、多く目にする意見ではないので、重ねて言う価値もあろうかと、申し出る次第です。〕

こう前置きして十余年前の私はこんなことを言っている。

①古代・近代の天皇制と、現憲法が定める象徴天皇制とは、まったく違うものだ。にもかかわらず、天皇後継論議にかかわるひとたちはこれを混同し、古代・近代天皇制を手本にして女性天皇の是非を議論している。大きな間違いだ。

②民主憲法に天皇条項が入ったのは、まぎれもなく政治的な都合だった。言うまでもなく主権在民と天皇制は絶対に相容れない。にもかかわらず民主憲法に天皇条項を置く工夫もしくは詭弁として、「天皇制」ではなく、「天皇」を国民統合の「象徴」としている。

③つまり憲法が定めるのは天皇制ではなく、「象徴天皇・制」という新制度にほかならない。その運用を議論する時、検討すべきは天皇制ではなく、民主主義下の「象徴天皇・制」でなければならない。

④保守政権や右翼は、象徴天皇・制があたかも天皇制であるかのように言い、ふるまうことで民主主義を圧迫してきた。左派陣営にもその傾きがあり、現存しない「天皇制」打倒を叫ぶことで、あたかも天皇制が存続しているかのような誤解を世に広め、ひとびとが「象徴天皇・制」について考察、議論する機会を封じてきた。

ざっとそんなことを言っての結論は、以下に原文を引用する。

〔昭和天皇の戦争責任を追求するのとは、きちんと分別して、天皇制ではなく象徴天皇・制の非民主的現状を批判する必要があった、と今、痛感する。

なぜならば、憲法にある以上、象徴天皇・制は遵法だ。そんなこと知るか、という態度をとっていいのは、革命家だけである。私は政治的には革命家ではない。それなら、考えなければならない。私は象徴天皇・制に不満がある。ならばその不満を、どう解消しようとするのか。改憲によってか、それとも運用によってか。

こう考えてきて、私はようやく、まったき憲法擁護の姿勢を持つことができた。これまでは、テキ側から「おまえたちは第9条は守れと言いながら、天皇条項は削除したいのだろう。それなら、同じ改憲論者ではないか」と指摘された時、立ち往生する危うさを抱えていたのだ。

だが今、私は、天皇条項の削除を求めない。天皇条項は紛れもなく、民主主義憲法、人権憲法の醜い傷だ。しかし、憲法全体にこめられた平和と民主への熱い願いに免じて、と言うよりも、成立の経緯からやむなくついたものとして承認し、短兵急な削除を求めることなく、いわば自然治癒を目指す。

私は、第9条を曲解して軍備を持ち海外派兵する違憲性に憤るのと同じレベルで、天皇条項を曲解して、あたかも天皇制そのものが象徴でもあるかのような運営をすることの違憲性に、憤る。「天皇制の復活」ではなく、天皇制そのものが象徴になっていくことの、民主主義国家としての矛盾と危機を、指摘する。民主主義国家の一制度である以上、象徴天皇・制は可能な限り民主的に運営せよ、と主張する。

これなら、天皇を好きな民衆とも、隊列を組めるのではないか。天皇は好きでも、大多数民衆は我々同様、天皇制への復帰など求めない、まっぴらだと思う、それは火をみるより明らかなのだから。

象徴天皇・制の民主的な運営を求めて、私はこう主張する。皇族の数を増やすなどもってのほか、皇族を天皇なみの扱いから解放し、通常の国民としての権利と義務を与えよ。世襲を定めた憲法の真意（天皇という地位の政治的利用を防ぐ）を汲んで、後継者は直系に限れ。資格はそれのみ、性別を問うがごとき性差別はするな。世襲の強制をやめて、当人の意志を必須の条件とせよ。

そして、当人の意志も含めて、後継者が絶えた時には、無理な存続を考えず、象徴天皇・制を廃止せよ。

象徴天皇・制の成立事情と、そのために制度がよぎなく抱えた、非民主的、反基本的人権尊重の性格を直視するならば、それこそが憲法成立時に暗に予定された、民主主義国家の正しい選択だ。

当然ながらその際、憲法から天皇条項は削除する。

その時ようやく、天皇たる人間は基本的人権を獲得し、私たちは民主主義国家のそれとして矛盾のない憲法を獲得するのだ。」

と言う間もなく、後継可能者に男児が生まれ、世は元の木阿弥になった。その間、象徴天皇・制を運営面から「民主的」に、つまり「人権本位」に改革しようとしたのは、ひとり現（平成）天皇ばかりであった。

遵法のぎりぎりをかけて、呆れるほど遠回しに言われた「年取って疲れるからそろそろ引退したい」という希望は、人民が無意識に持つ人権意識によく響くものだったから、みんな天皇に同情し、国も異例の運営を認めた。私の周辺は、ほぼ全員が天皇に同情し、彼の生前退位を支持した。

ただひとりだけ、違った。あれはなんと分類すればいいのか、合理的右派とでもいうのか、自他ともに保守政権側と認める政治的意見を持ち、「リベラル」を軽蔑し、たぶん人権論者をも軽蔑している裕福な会社社長のオジサン（七〇代）が、天皇をクソミソにこき下ろしたのだ。

「あれはバカですよ。自分の希望なんか言っちゃいかんでしょう、天皇は。象徴である、と憲法で決まってるんだから。象徴が意見なんか言っちゃイカンですよ。ただ黙って言われたことやってりゃいいんですよ。歴代天皇で一番バカじゃないの、あれは」

憲法解釈は正しい。私と同じだ。しかし、その憤り、罵りのあまりの激しさには呆然とするばかりだった。

天皇を神として尊崇するひとや、日本国の象徴として崇拝するひと、その特権故に憎むひと、天皇制に加担する第一人者であるがゆえに憎むひと、無関心なひと、などなどは見たことがあった。けれども、「ひとなみ」の暮らしを求めたからといって、天皇をこれほど激しく罵るひとは初めて見た。

それは、ちょうどワンマン社長が社員の失敗を批判する調子だった。

今にして思えば、ただ呆然としているべきではなかったかもしれない。

天皇は国民統合の象徴なのだから、それがいかに不出来だからといって、口汚く罵り侮辱することには、国民のひとりとして激しく抗議するべきだったかもしれない。ある種の右翼たちがそうしているように。

しかし私は国民意識を持ちあわせない。日の丸であれ君が代であれ天皇であれ、たかが国家の象徴をないがしろにしたからといって、そのひとを批判する感覚もない。だからやはりあの場合、呆然とするほかなかっただろう。

呆然としながら私は納得した。

天皇家が実権を失ってからの権力者、歴代大将軍たちや維新後の明治政府の実力者たちは、おおむねこのひとのような意識で天皇を見ていたのだろう、と。

他国にも例があるのかどうか知らないが、実権を失っても実力者のいわば帽子として存続する王家。まったくもってこれは特異な存在だと今更ながらに思う。故事に詳しい知人によると、権力者たちは天皇をギョク（玉）と呼び、「玉を握れば勝つ」などと言いながら争っていたそうだから、帽子と言うより玉なのかもしれない。

とにかく天皇家そのものは実権を失っても、鎌倉幕府が、戦国大名が、江戸幕府が、みずからは大将軍家として、天皇を握って実権をふるった。明治政府の権力者たちも同じだった。天皇家の武力、財力はもちろん、宗教的権威さえさほどのものとは見えない時代でも、それは続いた。そして権力者たちは、天皇を玉と呼んだ。権力者たちにとってみれば、天皇制のさなかでも、天皇は玉。自分の都合で大事にはしても、人間並みに意志を持つことなど許さない。それを掲げて敵を牽制し、人民を畏れ入らせるための玉だった。その意味で「天皇制は現存する」と言うのは正しい。

例のオジサンが見事に示してくれたのは、彼らにとって天皇は、天皇制であろうが象徴天皇・制であろうが、玉でなければならない、人間であってはならない、という認識だった。天皇をただ尊崇する者とただ憎む者には、決して見えない真実を彼らは見ている。

それほどあからさまではなくとも、天皇職にあるひとを人間扱いしないこと、つまり彼に人権を認めない点では、みんな大同小異だ。

いかにも、まったくの事実として天皇と呼ばれているひとは人間である。そして象徴なるものの本質は人間ではない。

象徴天皇とは、本質的に人権を、国家によって、徹底的に奪われた人間なのだ。そんな存在を象徴としていただき続けているから、この国でのひとびとの人権は限りなく軽いのではないか。

象徴天皇・制の運営のありかたを人権重視の見地からよく批判し、天皇の人権を回復する努力は、必ず世の人権意識を強める助けになるし、象徴天皇・制のおだやかな解消にもつながるのではないだろうか。そんな思いから、「象徴天皇と人権の研究」みたいなものが、各分野で盛んになることを期待している。

書評

『明治日本の産業革命遺産・強制労働Q&A』

竹内康人著（社会評論社刊）

梶川涼子（「反改憲」運動通信事務局）

以前にも竹内さんの著書の「書評」の依頼に、言い訳がましく「これは書評ではなく『読書感想文』である」と述べている。またも「読書感想文」と弁解させていただきたい。

本書の巻末に竹内康人著として、「調査・朝鮮人強制労働」のテーマで①炭鉱編、②財閥・鉱山編、③発電工事・軍事基地編、④軍需工場・港湾編、の四冊が広告されている（未読でゴメン）。ほかにアラート20号に蝙蝠さんの「書評」があり、「強制動員真相究明ネットワーク／民族問題研究所刊」として本書と同名のものがあって、この二書群の関係はよくわからない。前掲の広告のシリーズには竹内さんの相当周到な調査と分析があると思われる。それを踏まえての同一人物によるQとAが本書である。竹内本の特徴として、丹念なデータに並立してナマの関係者たちの証言がくる、いつもの構成だ。それによって表の数字も生き、人の実体験はその根拠が提示される。

「日本政府は官邸主導で『明治日本の産業革命遺産』をユネスコの世界遺産に登録しました。もともと『九州・山口の近代化産業遺産群』の名で登録しようとしたのですが、途中で『明治日本の産業革命遺産』と名称を変更しました。」という文で本書は始まる。いろいろなことを含んでいると思う。たとえば明治維新を成し遂げた薩長勢力の現在の後裔たちの願望とか、小国日本がいかに短時間に西洋科学を学習し偉大な成果を挙げ現在に至っているか、とか。なにしろ「官邸主導」なのだから。長州や薩摩の先進性、八幡製鉄・長崎造船所・高島炭鉱・三池炭鉱などの鉄と石炭と造船が「産業の成功物語」としてユネスコ遺産のお墨付きを得たことを取り上げ分析した仕事であるとわかってくる。政府がはじめた戦争で造船、鉄鋼、兵器生産の拠点となり儲け放題。敗戦になって連合軍による財閥解体で首を竦めた時期があったが、たちまち息を吹き返し現在も「官邸」と手を組む昔ながらのやり口で着々と官営事業、軍事産業で儲けている。

そのことはそれで各施設の開設、以後の分析として整理され述べられているが、竹内さんのほんとに言いたいことはそこではないと思われる。炭鉱産業にしても、製鉄工業にしても、造船所にしても夥しい労働者を必要とする。次々と拡大してゆく大陸への侵略戦争に、日本の労働力はとられていった。苛酷な炭鉱現場などが必要とする労働力は、海外植民地や占領地から調達しなければならない。その実態の究明が先行書の『朝鮮人の強制労働』の内容であるに違いない。まず、朝鮮、台湾につづいて侵略ちゅうの中国から、最後には連合軍の捕虜まで使役した。国内の受刑者も使ったことの紹介が中心内容だ。

それ以外に竹内さんのホンネともいうべき「コラム」が六本、添えられている。たとえば、コラム❶吉田松陰の「思想とアジア」では「萩の城下町が工業化に取り組んだ封建社会の特徴を濃密に現代に伝えるものとし、吉田松陰を工学教育の先駆者としています。／それは世界遺産登録に合わせてのあらたな解釈です。長州藩による密航留学生者が維新変革後にできた工部省を担ったとはいえ、吉田松陰の松下村塾と幽囚旧宅を産業遺産とするには無理があります。」というような批判をこのコーナーに託している。

なかでも私の無知に驚いたのは、コラム❹に「産業遺産国民会議は政府官邸とともに『明治日本の産業革命遺産』の世界遺産への登録をすすめてきました。」とあるのを見つけて、アッと思った。「産業遺産国民会議」とは！　ちかごろしばしば聞く名詞に連動しているではないか。しかも先に記した蝙蝠さんの「書評」には既にこの団体の正体が解析されている。

ユネスコによる「世界遺産」には、人類の輝かしい成果や発展の記録だけではなく、「負の遺産」も数多く含まれている。奴隷貿易の拠点、奴隷の農園労働遺跡、ナチスによるユダヤ人殺戮施設跡等々。この新たに登録された「明治産業革命遺産」の登録に際して当初韓国政府は朝鮮人の強制労働があったことを理由に反対したという。「二〇一五年六月に日韓の外相会議がもたれ、強制労働についても話し合われ、登録への合意がすすみました。」どんな外相会議があったのかはこの書では不明だが、「日本政府は朝鮮半島出身者が意に反して徴用されたこともあったが、違法な強制労働ではなかったという認識を示したわけです。」更に、「朝鮮人の強制動員がなされた時期は一九三九年から四五年にかけてですが、日本政府は徴用の期間を一九四四年の九月以降に限定し、その数を少なく見積もっています。」とのことから、外相会談の内容が察せられる。こうして竹内さんの意図がだんだん絞られていく。

強制労働の件にも従軍慰安婦の件にも「経済的威圧」などの手はそろそろ効かなくなってきているのではないか。近頃、聞き心地の悪い言葉、「日本はスゴ～イ」を代表するような薩長の「明治の侍」たちとその後裔への竹内さんの突っ込み、ぜひ読んで。

書評

『母の憶い、大待宵草――よき人々との出会い』

古川佳子（発行：白澤社、発売：現代書館）

編編

この本に収められたエッセイは、いずれも「反天皇制市民１７００ネットワーク」の通信に連載されたものである。この通信は、昭和天皇裕仁の死による前回の代替わり過程のなかで沸き起こった「天皇制はいやだ」の声とともになされた、「即位の礼・大嘗祭」違憲訴訟をベースにした機関紙である。

「即位の礼・大嘗祭」違憲訴訟は、大分、鹿児島、神奈川、東京など各地で取り組まれたのだが、一七〇〇名の原告を集めた大阪での「『即・大』いけん訴訟団」による裁判においては、高裁において原告の控訴は棄却されたものの、「即位の礼・大嘗祭」が神道儀式によりなされたことと、これに国費が執行されたことは違憲の疑いがある、とされ「実質勝訴」（同訴訟団）として終結した。

古川佳子さんは、この訴訟の原告であった。そしてまた、箕面忠魂碑・慰霊祭違憲訴訟でも、神坂玲子さんらとともに原告に立った方でもある。

訴訟の原告になるということ、しかも、勝訴が期待しにくく論理の抽象性も高い違憲訴訟は、ハードルが高いものとして躊躇されがちだ。だが、こうした訴訟の原告になるということは、天皇制に反対していくこと、平和を考え選び取っていくことであり、そして、意思を同じくする他の原告たちとつながっていく機会でもある。

古川さんは一九二七年生まれで、昨年には卒寿を迎えられている。この自伝的なエッセイ集においては、ご両親をはじめとする家族への想いや、これまでの人生でふれあった方々との関係が、淡々とした調子で綴られる。

しかし、古川さんが生きてきた時代は、まさに戦争のただなかにあった時代でもある。彼女の長兄・啓介さんは南方に出征し、台湾でマラリアに罹患、さらにビルマ戦線に送られて四五年五月に二七歳六カ月で亡くなった。また次兄・博さんは満州牡丹江の国境から一時筑波に戻り、その後、輸送船の空母雲龍に乗船してフィリピンに送られる途中、二四歳四カ月で台湾沖に沈んだという。そして、この次兄の所属部隊は「戦死ヤアハレ／兵隊ノ死ヌルヤアハレ」と歌った竹内浩三と同じ部隊であり、乗船した船の違いはあれ、いずれも「ひょんと死ぬるや」の運命をたどったのだった。

さきに「淡々とした」と書いたが、愚かで不正な戦争により早逝させられた肉親への感情が、静かなものであるはずがない。「母の憶い、大待宵草」と題されているのは、古川さんのお母さま、和子さんのエピソードだ。亡くなられるまで、小さな手帳に大切に短歌を書き続けていた和子さんは、周りに誰もいないとき、夕方に花開くオオマツヨイグサの茂みで、声を限りに亡き二人の息子の名を呼んだという。「その秘密を私に告げる母は、恥ずかしそうに肩をすくめて涙ぐんだ」。

和子さんの詠まれた「是れに増す悲しき事の何かあらん 亡き児二人を返せ此の手に」。天皇の戦争責任を深く問い続けた憤りと悲しみは、古川さんをも貫くものであった。

それから、古川さんは、彼女の母の短歌への想いを胸に、作家の松下竜一さんとの手紙による交流がはじまり、松下氏の裁判への支援を経て、ご自身の地元である箕面忠魂碑違憲訴訟の原告にご夫婦でなっていくことになる。

これ以降、サブタイトルで「よき人々との出会い」とされている通り、ご両親、箕面忠魂碑の神坂夫妻、大杉栄・伊藤野枝を両親とする伊藤ルイ（ルイズ）さんとの出会いなど、天皇制や「軍隊慰安婦」をはじめとした日本の戦争・戦後責任をめぐる想いと、裁判闘争のなかでの人々との交流が描かれる。私たち反天皇制運動連絡会の活動にも大きなご恩をいただいた歌人の三木原ちか（深山あき）さんのことも触れられており、どのような方だったのかを初めて知らせていただいた。

私たちが、これまでに持続してきた天皇制をめぐる運動の中で、地域の違い、年代の違いを超え、どのようなつながりをつくり、維持し深めていくか。古川さんのこの本を通じて、そのことの重要性をあらためて知らせていただいたという思いがする。心から感謝したい。

太田昌国の夢は夜ひらく100

みたび

百年後のロシア革命——極秘文書の公開から見えてくるもの

あるところで「ロシア革命百年」講座を行なっている。半年かけて、全六回である。昨年もこのテーマに関しては二回ほど公の場で話した。そのうち一回は、「レーニン主義」をなお墨守していると思われる人びとが多く集う場だから、緊張した。私は一定の〈敬意〉をもってこの人物に接してはきたが、いわゆる「レーニン主義者」であったことは一度もない。若い頃の思いを、恐れも知らず埴谷雄高を模して表現するなら、ヨリ自由な立場から『国家と革命』に対峙し、理論的に負けたと思ったら、選ぶ道を考え直そう、というものだった。〈勝ったか負けたか〉はともかく、レーニンが主導した道は選ばなかった。だから、その道を選び、今なお〈悔い改めない〉人びとの前では、いい意味で緊張するのである。

五三歳で亡くなったレーニンは、論文・著作の生産量が高い人だった。最終的には、ロシア語第五版で補巻を含めて全五七巻、日本語版はロシア語第四版に依拠し全四八巻の全集が編まれた。いずれも、一九五〇年代から六〇年代にかけての、息の長い出版の仕事だった。レーニンの著作をめぐって、事態が決定的に変わるのは、ソ連体制が崩壊した一九九一年以降である。ソ連共産党中央委員会のアーカイブに厳密に保管されてきていた極秘文書が公開されるようになった。書き込みも含めてレーニンの手になる文書三七〇〇点、レーニンが署名した公的文書三〇〇〇点が明るみに出た。極秘にされていた理由は、以下による。（一）国家機密に関わるもの。陰謀的な性格を持つもの。（二）公定レーニン像に抵触する、不適切なイデオロギー的性格をもつもの。（三）判読不能・鑑定上の疑義のあるもの。技術的・学術的な問題。（文書の点数は、池田嘉郎による）

ロシアではもとより、英語圏・フランス語圏でもこれらの文書を参照しないロシア革命研究はもはやあり得ない。重要な著作は、いくつか日本語訳も出版されている。日本でも、梶川伸一、池田嘉郎、故稲子恒夫のように、従来の未公開文書を駆使して重要な仕事を行なっている研究者が生まれている。そんな時代がきて、四半世紀が過ぎた。

それらの資料を読みながら、私はつくづく思う。党中央委員会の文書管理部は、一貫して、実に〈すぐれた〉人物を擁していた。同時代的に、あるいは後世においてさえ、この文書を公開しては、レーニンとロシア革命のイメージをひどく毀損すると「的確に」判断できていたからである。この短い文章では具体的な引用はできない。ただ、〈敵〉と名指しした人びとに対する、公開絞首刑の執行を含めた仮借なき弾圧が幾度となく指示されているとか、レーニンの忠実な「配下」であったトゥハチェフスキーが「反革命」鎮圧のために毒ガス使用を指示したとか程度には触れておこう。「富農を人質に取れ」という苛烈なレーニンの指令に驚き、心がひるみ、この指令を無視する地方の党幹部の姿も現われる。つまり、この幹部のように、そしてクレムリンの文書管理部局スタッフのように、難局極まりない内戦の渦中にあっても「的確な」判断を成し得た人物は実在したのである。レーニンと革命が掲げる〈目的〉に照らせば、採用してはいけない〈手段〉があることを知っていた人物が……。

その意味では、一九二一年のクロンシュタット叛乱と、一九一八～二一年のウクライナのマフノ農民運動に対して、レーニンやトロツキーが先頭に立って「弾圧」した事実は、夙に（同時代の中でも）知られていた。前者の叛乱は、「革命の聖地」ペトログラードのすぐ近くのクロンシュタット要塞で進行した。それは、ボリシェヴィキの一党独裁を批判する立場から革命の根源的な深化を求めた水兵・労働者の公然たる動きであり、ボリシェヴィキも機関紙上で反論せざるを得なかった。叛乱なるものの背後にはフランスのスパイがいる、というお定まりの宣伝ではあったが。後者の場合は、ボリシェヴィキの弾圧にさらされる農民アナキストが渦中で情報を発信した。一九二二年末に日本を脱出した大杉栄は、翌年二月パリに着くと、マフノ運動関連の文献渉猟に全力を挙げている。七月に帰国して、翌八月には「無政府主義将軍 ネストル・マフノ」という優れた紹介文を執筆した。大杉が虐殺される前の月である。ロシア革命は、当時も百年後の今も、その本質について、どんな情報に基づいてどのような判断を持つかを迫られる、或る意味で「おそろしい」場であり続けている。

（9月1日記）

マスコミじかけの天皇制 26

「平成」最後の「全国戦没者追悼式」の〈オコトバ〉

――〈壊憲天皇明仁〉その24

天野恵一

今年の私たちの〈八・一五〉は「『明治一五〇年』天皇制と植民地主義を考える8・15行動」として取り組まれた。それは、来年の「生前退位」が決まっているアキヒト天皇最後の、国がつくりだした戦死者を国（天皇）が「尊い犠牲者」として賛美してみせることによって戦争を肯定的に意味づける政治儀式への抗議である。それは同時に、安倍政権がくりひろげている近代天皇制国家一五〇年を「明治」の「五箇条の御誓文」に始まる「民主政治」の一貫せる歴史として、〈天皇制ファシズム〉にいたる侵略・植民地支配の事実も、戦後日本の軍事強国アメリカの侵略戦争に軍事的に加担し続けた長い歴史も、まるごと無視して、それを全肯定し賛美する「明治一五〇年」キャンペーンに抗する意思を示す行動でもあった。

例年どおり、私たちのデモ行進は、「日の丸」右翼の「非国民、日本から出ていけ！」の怒号と暴力的介入に包囲された。「平成の代替わり」プロセスである。右翼とのなれあい警備（ある程度までやらせるという話がついていることは明白、私たちがそんなことをしたらすぐ大量逮捕になることまちがいなしの暴行を、何度でも同じ人間にくりかえさせているのだ）とはいえ、大量の機動隊員を動員して流血ギリギリのところで規制。

毎年、毎回、私は思う。こうした状態に、まったくふれず、天皇（国家）儀礼の天皇の「お言葉」なるものを大々的に賛美し続けるマスコミの姿勢も含めて、いったい日本のどこに憲法が保障しているはずの「言論の自由」「思想表現の自由」が存在しているというのか。天皇制批判は、絶対的タブーである。それは、天皇の発言を「おことば」などという絶対敬語で示すことがあたりまえになっているマスコミの姿勢や、右翼による暴力的脅迫はあたりまえという国家（警察）の政治的態度にも象徴的に示されている。

全国戦没者追悼式は、サンフランシスコ講和条約の発効の年、一九五二年にスタートしている。山田昭次は『「全国戦没者追悼式」批判――軍事大国化への布石と遺族の苦悩』（影書房）で、こう語っている。

「君が代奏楽のうちに天皇、皇后が入場した。天皇の『お言葉』は次のようだった。

『今次の相つぐ戦乱のため、戦陣に死し、職域に殉じ、また非命にたおれたものは、挙げて救うべくもない。喪心その人々を悼み、その遺族を想うて、常に憂心やくが如きものがある。

本日この式に臨み、これを思い彼を想うて、哀傷の念新たなるを覚え、ここに厚く追悼の意を表明する』（「毎日新聞」一九五二年五月二日夕刊）。

この『お言葉』は史実を無視している。

戦死者は日本国家の動きと無関係に起こった『相次ぐ戦乱』のために戦死したのではない。天皇制国家が中国を侵略した結果、東アジアに利害関係をもつアメリカをはじめとする連合国との太平洋戦争を引き起こしたのである。従って大元帥として日本軍に対する統帥権をもつ天皇には、国内外の戦死者に対しての責任があることは明白である。／しかし天皇は、この際の『お言葉』でも、その後の全国戦没者追悼式の『お言葉』でも、内外の戦死者に対して一言の謝罪の言葉も述べなかった」。

さて、代替わりした「明仁」天皇のこのセレモニー最後の〈オコトバ〉について、全マスコミには、戦後五〇年の一九九五年以来「さきの大戦に対する深い反省」の一文がプラスされ続けてきたこと、さらに「戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ」と戦後日本の歴史をまるごと肯定する表現が、今回プラスされたことを、大々的に、ありがたがる報道の洪水である。

しかし、自分が継承した天皇制の歴史的責任などまったく無視し、ヒロヒトの「無責任」はキチンと継承されたままである。そこには安倍の言葉とちがって「反省」のポーズはある。それだけ政治的欺瞞度が高いというにすぎない。

最高責任者（制度）の責任を問題にする謝罪の言葉が何故ないのか、このあって当然の疑問は一度も正面からマスコミ世界の中で、発せられたことはない。批判は、まったくのタブーなのである。

さて、この式典の〈オコトバ〉は、戦後の保守政権の「解釈」で、合憲化されてきたが、政府・宮内庁の原文づくりとチェックのプロセスがあるとはいえ、明記された「国事行為」以外を禁止している憲法には違反する行為である。

自分の〈オコトバ〉批判を許さない「言論の自由」を破壊し続けた存在である天皇の、この儀礼での最後の違憲の〈オコトバ〉などを、ありがたがってなどいられるか。

野次馬日誌

8月1日〜8月31日

【8月1日】

徳仁◆三重県伊勢市にある県営サンアリーナで、全国高校総合体育大会の総合開会式に出席。

代替わり◆政府が、明仁の退位と新天皇の即位に伴う一連の儀式の準備作業を統括する「皇位継承式典事務局」を設置。同事務局は計26人の専従態勢を敷き、事務次官級であるトップの局長に、山崎重孝・元内閣総務官が就任。外務省が、儀式に参加する外国賓客の受け入れや接遇を行う準備事務局を発足させる。

【8月2日】

明仁、美智子◆西日本豪雨で大きな被害が出た岡山県の伊原木隆太知事と広島県の湯崎英彦知事を皇居・御所に招き、被害状況について説明を受ける。両知事が終了後、報道陣の取材に応じ、明仁から「復興がしっかりと進むように祈っています」と励まされたと明かす。

徳仁◆三重県津市にある県立子ども心身発達医療センターと、併設の県立かがやき特別支援学校を訪問。鈴鹿市で、全国高校総合体育大会のソフトテニスの試合を観戦。夜、帰京。

【8月4日】

明仁、美智子◆札幌市の丘珠空港発の特別機で利尻島を初めて訪問。利尻町の「ウニ種苗生産センター」を視察。観光名所のオタトマリ沼を訪れる。二石海岸を散策。車で約60キロを移動し、利尻島を周遊。夕方に利尻空港発の特別機で滞在先の札幌市に戻る。

徳仁、雅子◆兵庫県西宮市の甲子園球場で5日に開幕する第100回全国高校野球選手権大会の開会式出席などのため、羽田発の空路などで兵庫県入り。神戸市中央区の県立こども病院を訪れる。

即位行事記録◆内閣府が、天皇陛下の即位行事の詳細をまとめて発行した「平成即位の礼記録」など政府式典記録の一部について、利用制限を国立国会図書館に要請し、閲覧できない状態になっていることが分かったと報道。行事に参加した要人の宿泊先や移動手段など警備に関わる情報が含まれているのが理由で、翌年の皇位継承式典に備えて「テロ対策」を重視し、制限が必要と判断したものだが、複数の私立大学図書館では閲覧可能で、情報公開の観点から「過剰制限」との指摘が出ているという。「平成即位の礼記録」には明仁、美智子や首相らの行動予定と配置のほか、外国要人の席次表なども記載されており、総理府（現内閣府）が1991年10月に発行し、国立国会図書館法の「納本制度」に基づいて納入したのに対し、内閣府は前年1月「情報公開法で不開示とされるべき情報を含んでいる」として利用制限を申し出たほか、同様に警備上の理由で「昭和天皇大喪の礼記録」や「天皇陛下御在位二十年記念式典記録」「東日本大震災六周年追悼式記録集」など計10冊の制限も要請し、閲覧できない状態が続いている。

【8月5日】

明仁、美智子◆札幌市で「北海道150年記念式典」に出席。羽田着の特別機で帰京。

徳仁、雅子◆兵庫県西宮市の甲子園球場で、第100回全国高校野球選手権大会の開会式に出席。

改元◆1989年1月7日の昭和天皇死去に伴う改元に関し、中曽根、竹下両内閣で新元号の選定状況を把握していたのは首相と官房長官ら政権中枢に限られていたことが分かる。翌年5月1日の改元を前に、「平成」改元時に元号担当の内閣内政審議室長だった的場順三が共同通信の取材に明らかにしたと報道。

「北海道150年」◆かつての「蝦夷地」が北海道と命名されてから150年目に当たるとして、札幌市で記念式典が開かれる。明仁、美智子が出席。

【8月6日】

明仁、美智子、徳仁、雅子◆明仁、美智子が、広島への原爆投下時刻の午前8時15分に合わせ、皇居・御所で黙とう。徳仁、雅子が東京・元赤坂の東宮御所で黙とう。

元号◆古屋圭司・衆院議院運営委員長ら保守色の強い自民党議員が、菅義偉・官房長官と首相官邸で会談し、新元号の制定と発表は翌年5月1日の新天皇の即位後とすべきだと要請。

A級戦犯「廃祀」◆日本遺族会会長を務めた古賀誠・元自民党幹事長がBSフジ番組で、靖国神社に合祀されているA級戦犯について、祀った事実をなかったことにする「廃祀」とするよう提案。

【8月7日】

徳仁◆石川県珠洲市で行われる第17回日本スカウトジャンボリーの集会出席などのため、羽田発の民間機で石川県入り。空路で帰京。／日仏友好160周年に合わせ、徳仁が9月7〜15日、フランスを「公式訪問」することが閣議で了解される。宮内庁は現地での日程や日本での前後の予定などを考慮し、雅子の同行を見送ったと報道。

秋篠宮、紀子◆長野県松本市で開催された全国高校総合文化祭の総合開会式に出席。開会式で演劇を披露した女子生徒らと懇談。全国の高校から集まったマーチングバンドのパレードを松本市内で観賞し、帰京。

小室圭◆眞子との婚約が内定している小室圭が、米ニューヨーク州にあるフォーダム大のロースクールで学ぶため、成田空港から現地に向けて出発。

天皇在位30年記念貨幣◆財務省が、明仁在位30年記念貨幣の図柄を発表。1万円金貨は、表に鳳凰とキリ、シラカバを、裏に菊の紋章をデザインし、販売価格は金貨単品で13万8千円と報道。500円の銅貨も500万枚発行し、図柄は表が、結婚の際にパレードで使用した儀装馬車とキリ、シラカバで、裏は菊の紋章。

【8月8日】

徳仁◆江戸時代から伝統の製塩法を受け

継ぐ石川県珠洲市の塩田や、国指定名勝の輪島市の棚田「白米千枚田」などを視察。輪島市の特別養護老人ホームを訪ね、高齢者と交流。羽田着の民間機で帰京。

秋篠宮、紀子、眞子◆眞子との婚約が内定している小室圭と母親に対し、秋篠宮、紀子が前年末から当年にかけ、結婚の前提として、週刊誌で報道されている母親の「金銭トラブル」の解決を求めていたことが、関係者への取材で分かる。秋篠宮と紀子は「このままでは（正式な婚約の）『納采の儀』は行えない」との趣旨の意向も伝えたといい、小室家側に事実関係を公表するように併せて求めたと報道。

眞子◆「大山開山1300年祭」の記念式典に出席するため、羽田発の民間機で鳥取県入り。米子市美術館を視察。夜、大山寺の参道で和傘を使った「お盆の大献灯」を鑑賞。／宮内庁を通じ、7月のブラジル訪問を終えた感想を発表。

【8月9日】

明仁、美智子◆皇居・御所で、長崎市の平和公園で催された「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」の様子をテレビで見ながら、原爆が投下された午前11時2分に合わせて黙とう。

皇太子一家◆東京・元赤坂にある東宮御所で、長崎の原爆の日に当たって黙とう。

愛子◆ロンドン郊外にある名門私立イートン校のサマースクールを終え帰国。東京・元赤坂にある東宮御所の正門前を車で通過する際、報道陣から留学の感想を尋ねられ「楽しかったです」。

眞子◆山岳信仰の地としても知られる鳥取県の大山の開山1300年を記念し、米子市公会堂で開催された式典に出席。

明仁即位記録◆明仁の即位行事などを記載した国立国会図書館所蔵の政府式典記録計10冊を巡り、要人警備に関する情報があるとして内閣府の要請により閲覧できなくなっていた問題で、同図書館がうち6冊の制限は不要だと8日付で決め、現在は閲覧できると、関係者が明らかに。

元号◆1989年1月7日の昭和天皇死去に伴う改元を巡り、政府が本命の「平成」で決着するように有識者懇談会の議論を誘導していたことが分かる。「平成」改元時に元号担当の内閣内政審議室長を務めた的場順三が共同通信の取材で明らかに。

【8月10日】

紀子、悠仁◆広島市中区の平和記念公園を訪問。夏休みを利用した「私的」な日帰り旅行と報道。原爆資料館を訪れ、広島市内のホテルで、被爆者と懇談。

愛子◆宮内庁を通じて、英国短期留学の感想を発表。約3週間の現地滞在中の日々を「とても楽しく、充実した滞在になりました」とつづったと、小田野展丈・東宮大夫が記者会見で明らかに。

靖国参拝◆菅義偉・官房長官が記者会見で、安倍晋三首相が15日の終戦記念日に靖国神社を参拝するかを問われ「首相自身が適切に判断する」。

追悼施設◆菅義偉・官房長官が記者会見で、靖国神社と別に、国立の戦没者追悼施設を新設する構想について「多くの国民が理解し、敬意を表することが重要だ。国民世論の動向を見極めながら慎重に検討する」。

【8月11日】

明仁、美智子、徳仁、雅子、愛子◆皇太子一家が皇居・御所を訪れ、愛子が英国短期留学から帰国したことを明仁、美智子に報告。皇居・半蔵門前を車で通過。これに先立ち愛子が、帰国を報告するため歴代天皇などを祭った皇居・宮中三殿を単独で参拝。

【8月12日】

天皇、皇族◆故高円宮の三女絢子と日本郵船社員の守谷慧の結納に当たる「納采の儀」が、東京・元赤坂の赤坂御用地にある高円宮邸で行われ、正式に婚約が成立し、結婚式は10月29日に東京・明治神宮で催されると報道。

【8月13日】

明仁、美智子◆西日本豪雨で大きな被害を受けた岡山、広島、愛媛、福岡の4県に対し、宮内庁を通じて見舞金を贈る。

秋篠宮、紀子◆東京都内で行われた第18回アジア競技大会の日本選手団の結団式に出席。

眞子婚約◆秋篠宮の長女眞子との婚約が内定している小室圭が、留学先の米ニューヨークのフォーダム大ロースクールに通学し、新学期の説明会に出席。

【8月14日】

明仁、美智子◆西日本豪雨で被災した広島、岡山、愛媛の3県へ、9月中旬に見舞い訪問する方向で検討されていることが、宮内庁幹部への取材で分かる。

裕仁◆太平洋戦争の開戦前夜、昭和天皇への報告を終えた東条英機首相の発言や様子を記したメモが見つかり、東条の発言を書き留めた湯沢三千男・内務次官＝1963年に死去＝のメモを遺族が保管していたもので、開戦の手順を報告する東条に、昭和天皇が「うむうむ」と応じ、動揺を見せなかったことから、東条は「全く安心している。このような状態であるから、既に勝ったと言うことができる」と述べたという内容と報道。東条が「重荷を下ろしたような様子だった」「微薫を帯び（酒に酔っており）」「陛下に褒められてもいいだろうと語った」と、賛意を得た満足感や緊張から解放された様子が記されているという。

戦没者追悼式◆菅義偉・官房長官が、政府が15日に主催する全国戦没者追悼式について「全国民が深く追悼の誠をささげ、恒久平和の確立への誓いを新たにするものだ」との談話を発表。

【8月15日】

明仁、美智子◆日本武道館で開かれた政府主催の全国戦没者追悼式に出席。翌年4月30日の退位を控える明仁が、「お言葉」に「戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ」との文言を加え「反省」という言葉を4年連続で使ったと報道。

戦没者追悼式◆「終戦」から73年を迎え、政府主催の全国戦没者追悼式が日本武道館で開かれる。厚生労働省によると、全国の戦没者遺族約5200人が参加。

靖国問題◆「終戦」の日を迎え、安倍内閣の閣僚が東京・九段北の靖国神社への参拝を前年に続き2年連続で見送り、安倍晋三首相は参拝せず、自民党総裁とし

て私費で玉串料を「奉納」。

千鳥ケ淵墓苑◆安倍晋三首相が、東京都内の千鳥ケ淵戦没者墓苑を訪れて献花。

【8月16日】

徳仁、雅子、愛子◆静養のため、静岡県下田市にある須崎御用邸入り。到着した伊豆急下田駅で、住民ら約230人の出迎えを受ける。御用邸近くの海岸を散策。

宮中料理◆「昭和時代」に宮中の食卓を支えたシェフ工藤極＝東京都練馬区＝が、天皇家の食生活や、仕事の舞台裏を自作のイラストを交えて紹介した著書「陛下、お味はいかがでしょう。『天皇の料理番』の絵日記」を出版したと報道。

【8月17日】

宮内庁公文書◆宮内庁が、職員の人事や連絡網、皇室にゆかりがある門跡寺院の名簿など、26項目をまとめた公文書1件が所在不明になっていると発表。

杉田水脈◆性的少数者を「『生産性』がない」と表現、人権団体などの批判を浴びた自民党の杉田水脈・衆院議員が、ジュネーブで始まった国連人種差別撤廃委員会の対日審査会合を傍聴。

【8月18日】

毒ガス人体実験◆日中戦争や太平洋戦争当時に旧日本海軍が、毒ガス研究のため国内で人体を使って実験していたことが分かる。皮膚をただれさせる「びらん剤」を塗るといった内容を詳述した複数の資料が、防衛省防衛研究所と国会図書館に所蔵されているのを共同通信が確認したもので、一部は軍関係者が対象と明記され、皮膚に水疱が生じる被害が出たと記されていると報道。毒ガスを人に吸わせる実験の論文が国会図書館にあることも判明し「ガス検知ならびに防御に資する」目的で41年に実施した実験では、くしゃみ剤や嘔吐剤と呼ばれた種類の毒ガスを吸わせ、感知までの時間を調べていたという。

【8月19日】

新元号◆政府が翌年5月1日の新天皇即位に伴う改元を巡り、中国の古典（漢籍）から採用することが慣例となっている元号の出典に関し、日本の古典も選択肢に入れて検討していることが分かる。平成改元の際も中国文学や東洋史学に加え、ひそかに国文学の専門家へ新元号候補の考案を委嘱しており、古事記や日本書紀といった作品が候補になるとみられると、関係者が明らかに。

【8月20日】

明仁、美智子◆東京都文京区の東大安田講堂を訪れ、国際生産工学アカデミー第68回総会の開会式に臨席。開会式後、レセプションに出席。

高御座◆宮内庁が、新天皇の即位を国内外に示す翌年10月22日の「即位礼正殿の儀」で、新天皇が使う玉座「高御座」について、現在保管されている京都御所・紫宸殿で、東京都内への搬送に備えた解体作業を報道陣に公開。9月中の搬送を予定していると報道。

【8月21日】

明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子が9月28日から2泊3日の日程で、国体の総合開会式出席などのため、福井県を訪問すると発表。

徳仁、雅子、愛子◆静養のため滞在していた静岡県下田市の須崎御用邸から帰京。

【8月22日】

明仁、美智子◆静養のため、北陸新幹線で長野・軽井沢入り。

【8月23日】

明仁、美智子◆長野県軽井沢町で、戦後に中国の旧満州から引き揚げてきた人たちが入植した大日向開拓地を訪れ、野菜畑を散策。

徳仁◆東京・上野にある東京国立博物館平成館を訪れ、縄文時代の土器などを展示した特別展「縄文―1万年の美の鼓動」を鑑賞。鑑賞終了後、特別展関係者と懇談。

裕仁◆昭和天皇が85歳だった1987年4月に、戦争責任を巡る苦悩を漏らしたと元侍従の故小林忍の日記に記されていることが分かる。共同通信が日記を入手したもので、昭和天皇の発言として「仕事を楽にして細く長く生きても仕方がない。辛いことをみたりきいたりすることが多くなるばかり。兄弟など近親者の不幸にあい、戦争責任のことをいわれる」と記述していると報道。87年4月7日の欄に「昨夕のこと」と記されており、昭和天皇がこの前日、住まいの皇居・吹上御所で、当直だった小林に直接語った場面とみられる。中国外務省の陸慷・報道局長が定例記者会見で「侵略戦争について正しい認識を持つことが日本側にとって当然あるべき責任ある態度だ」。「中国は日本政府に対し、侵略の歴史を直視して反省し歴史問題に適切に対処するよう一貫して促してきた」。

【8月24日】

「即位礼」◆昭和天皇の侍従だった故小林忍が、90年11月に催された明仁の「即位礼正殿の儀」を巡り「ちぐはぐな舞台装置」「新憲法下初めてのことだけに今後の先例になることを恐れる」と当時の政府対応を批判する見解を日記に記していたことが分かる。

「明治150年」◆枝野幸男・立憲民主党代表が金沢市の講演で「保守を声高に叫ぶ人たちが大事にする日本の歴史は明治維新以降の150年しかないのかと、時々首をひねる。偏った歴史観を持っているのではないかと強く感じる」。

【8月25日】

明仁、美智子◆長野県軽井沢町にあるテニスコートを訪れる。

徳仁、雅子、愛子◆静養のため、東北新幹線で栃木県入り。那須塩原駅に到着し、集まった市民らと交流したと報道。那須御用邸内の休憩所「嚶鳴亭」周辺を散策。

眞子◆東京・有楽町のホールで行われた「全国高校生の手話によるスピーチコンテスト」に出席。

【8月26日】

新元号◆共同通信社が25、26両日に実施した全国電話世論調査によると、翌年5月1日の新天皇即位に伴う新元号の公表について、改元1カ月前より早い時期を求める人は37・8％、政府が想定する1カ月前でよいとしたのは33・8％で、即位と同時がよいとの回答は22・6％となったと報道。

【8月27日】

明仁、美智子◆美智子が、群馬県草津町で開催中の音楽祭「草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティヴァル」のワークショップに参加し、ピアノを演奏。明仁、美智子が静養先の長野県軽井沢町から草津町に移る。

信子、彬子、承子◆宮内庁、故寛仁の妻信子と長女の彬子、故高円宮の長女承子が、9月に外国を訪問すると発表。信子はイタリア、彬子はトルコ、承子は皇族で初めて東ティモールを訪れると報道。

【8月28日】

障害者雇用◆宮内庁が、職員の障害者手帳を確認せず、健康診断の結果だけで12・5人を水増ししていたとして、担当者が宮内記者会に事情を説明。

自民党総裁選◆安倍晋三首相が自民党役員会で、翌月7日告示の党総裁選への立候補を正式に表明したと報告。「皇位継承、東京五輪・パラリンピックなど大きな時代の節目を迎える中、この国のあるべき姿について骨太の議論を行いたい。堂々とした議論を展開する」。

【8月29日】

明仁、美智子◆長野県軽井沢町と群馬県草津町での静養を終え、北陸新幹線で帰京。

「五輪テロ対策」◆2020年東京五輪を見据え、イスラエル企業が主催する「対テロ・サイバー攻撃」の機材や技術を売り込む見本市が、川崎市とどろきアリーナ（同市中原区）で始まる。

【8月30日】

対日審査◆国連人種差別撤廃委員会が、当月中旬に実施した対日審査の報告書を公表。旧日本軍の「従軍慰安婦」問題で、被害者中心の取り組みにより持続的な解決を図るよう日本政府に勧告。沖縄で米軍基地の存在により軍用機の事故や女性への暴行事件が後を絶たない状況に懸念を示し、日本政府に住民の安全のための対策を取るよう勧告。ヘイトスピーチ対策について、2016年に施行されたヘイトスピーチ対策法は十分でないとの認識を示し、その見直しなどを勧告。

【8月31日】

宮内庁予算◆宮内庁が、2019年度予算の概算要求を発表。皇居・御所の改修費など代替わりの費用は19億円を計上、代替わりに伴う体制整備のため、職員36人の増員を求め、これにより、翌年5月以降の側近部局は、退位後の明仁、美智子を担当する「上皇職」が65人、新天皇一家の「侍従職」が75人、皇嗣となる秋篠宮一家の「皇嗣職」が51人となり、即位の礼など一連の儀式は、秋に政府が設置する首相がトップの「式典委員会（仮称）」で細部を詰めるため、代替わり後の「大嘗祭」も含め、費用は金額を明示しない「事項要求」としており、要求総額は210億円で、18年度当初予算比1・4％減だが、年末にまとめる予算案には事項要求分が上積みされると報道。

代替わり◆外務省が、2019年度予算の概算要求を発表。要求総額は18年度当初予算比16・3％増の8102億円。うち政府開発援助は14・3％増の4967億円。大阪市で開く20カ国・地域首脳会合や、即位の礼に出席する「外国賓客」の宿泊費など大型行事の関連経費に計345億円を盛り込む。

集会の「眞相」

2018 ヤスクニキャンドル行動

八月一一日、今年も「平和の灯を！ヤスクニの闇へ キャンドル行動」を韓国YMCA（東京・水道橋）で開催しました（一三回目）。今年のテーマは、「『明治150年』とヤスクニ、そして改憲」。このテーマで、シンポジウム、遺族証言、コンサートなどを実施しました。二〇一八キャンドル行動には、韓国の若者グループをはじめ四〇〇名を超える方々に参加いただきました。

シンポジウムでは、内海愛子さんの進行のもとに、高橋哲哉さん、吉田裕さん、権赫泰さんが報告されました。高橋さんは、安倍政権が明治維新をもち上げ、日本会議が一一月三日を「明治の日」とする運動を進めていることを批判しつつ、「根本問題は今も、日本が植民地主義を克服できず、近隣諸民族との信頼関係を構築することができないこと」にあると指摘。「戦争神社であり植民地主義の歴史そのものである靖国に反対し、〝継続する植民地主義〟を克服することが今の課題だ」と結論づけられました。権赫泰さんは、南北会談―板門店宣言などにより「安保が歴史を殺す」体制が終わりつつある中で、「靖国、『慰安婦』など歴史問題解決の努力こそが平和秩序を構築する」と強調、「安保を殺し歴史を生かさなければならない」と訴えました。

遺族証言では、父親が戦争に動員され、靖国に合祀されている遺族の李明九さんが「一日も早く父を靖国から解放し、私もこの苦痛の中から抜け出したい」とアピールしました。

コンサートには、ソン・ビョンフィ、イ・ジョンヨル、ジンタらムータ、生田卍さんなどが出演。韓国の若者グループも、キャンドル革命の中で歌われた「光は闇に負けない」を披露しました。熱のこもった歌唱、演奏でコンサートは例年以上に盛り上がりました。

キャンドルデモには、辺野古新基地建設反対の行動を終えた方々などにも合流していただきました。

例年のように右翼、排外主義者が妨害してきましたが、デモ隊の人数、シュプレヒコールがそれをはね返しました。今年のキャンドル行動は、日韓の若者の参加も増え、未来を感じさせる行動となりました。

（ヤスクニキャンドル行動実行委員会／矢野秀喜）

日本帝国主義一五〇年を沖縄から問う

集会直前の八日に翁長知事の訃報が伝えられ、私たちは言葉を失った。

話者の湖南通さんは直前まで沖縄にいたので、滞在中に訃報に接している。「この数日精神的に不安定で」と前置きしながら前日池袋での「沖縄県民大会に呼応する8・11首都圏大行動」の様子から話始めた。湖南さんは論文と言ってよさそうなレジュメを用意してきたが、それには沿わずに自在に話をして私たちを驚かせた。

今回の企画はそもそも沖縄出身県内在住の湖南さんを私たちが知ったところから始まっている。彼を話者にしなければ「沖縄から問う」などと言えなかった。天皇制に反対しようが社会主義を目指そうが、主催者の私（たち）はどうやっても日本人であることからは逃れられない。討論の際、最初に出た意見は「米軍基地は日米安保の問題であり日本の国内法の問題なのだから、嫌ならば独立するしかない」と言うものだった。私たちは自身が日本人であることの負性を自覚しながら思考し続けなければ、こんなにも無責任な発言をしてしまうのだ。この発言は、私たちが現在どこにいるのかを明確に表しているのだと思う。今いるここから変えていかなければどうにもならない。

集会後には駅周辺でデモをした。コースを短くしたら三〇分で終わってしまいやや反省。今回右翼はなし。なお、デモ出発地点のつくば駅前ペデストリアンデッキ、センター広場の使用を巡り、つくば市公園・施設課から、使用は有料と言われ、これまでの対応と違うのでその場で担当者に確認を求めたが取り合わず、小さな集まりゆえ使用料をためらい出発地点を変更して後日提出しに行くと、使用料云々は担当者の間違いだったと告げられた一幕があった。この件については つくば市に抗議を申し入れる予定である。担当者の勘違いで済む問題じゃないだろ、つくば市。

交流会では「日本が帝国主義になったのはいつからなのか。日本帝国主義一五〇年は正しい認識なのか?」と議論になったりしながら楽しく交流した。

一二日につくば市の吾妻交流センターで開催。集会は一九名、デモに一一名参加。

（戦時下の現在を考える講座／加藤匡通）

「明治150年」天皇制と近代植民地主義を考える8・15行動

八月一五日、在日韓国ＹＭＣＡ・9階国際ホールでタイトルの集会を行った。会場は一八五人の参加者で埋め尽くされ熱気に溢れるなか、今回、四つの課題をたて、それぞれに発言してもらった。

最初に安倍・靖国違憲訴訟の弁護団である酒田弁護士は「即位・大嘗祭訴訟に関する問題提起」。三〇年前の訴訟の確認。そしてヒロヒトとアキヒトをめぐる社会情勢の違いに触れ、最後に今回準備されている訴訟の理論構成について報告された。

次に「北方領土の日」反対！「アイヌ新法」実現！全国実行委員会（ピリカ全国実）の黒岩さんは、アキヒト・ミチコの利尻島訪問・北海道一五〇年式典出席への反対行動の報告。アイヌモシリ侵略は天皇制国家による他民族侵略・支配の「原型」と話され、戦後のヒロヒトの「人間宣言」内の「五箇条の誓文」が戦後民主主義の「原点」かと問う。

続いて「元号はいらない署名運動」の井上森さんからは、アキヒトの「社会の停滞を懸念」発言で始まった平成代替わりから、中央官庁、ＪＲ、警察からの元号「撤退」の実情の報告があり、最後にオウム大量処刑に触れ、日本において最高度の国家暴力を正当化する論理は天皇制しかないとしめくくった。

最後に反天連の新さんは「『平成の三〇年』＝明仁天皇との『対決』の三〇年」について。アキヒトの言動の微妙な変化から、「時代とともに変わっていく」天皇の政治の役割を分析した。今回の天皇主導の「退位」で見せつけられた、天皇による天皇制の再定義は、明仁天皇制が三〇年かけてそこに収斂していった、天皇像の到達点だと集約した（詳細は報告集参照）。

質疑応答の時間が取れなく残念であったが、「道徳教育」の問題性に言及されている北村小夜さんから「新しい教科書をつくる会」の流れの教育出版が唯一、アイヌ問題に触れていることを補足され、そこにどのような魂胆があるのかと問われた。

その後、沖縄一坪反戦地主会・関東ブロック、日韓民衆連帯全国ネットワーク、オリンピック災害おことわり連絡会、米軍・自衛隊参加の防災訓練に反対する実行委員会から連帯アピールをもらい、靖国神社に向け元気にデモに出発した。手作りの幟や横断幕、反天龍（?）、そして参加者二五〇人、何も誰も欠けることなく「天皇制はいらない！」のコールを響かせた。交流会では懐かしい仲間、新しい仲間の発言もきけて、ワイワイガヤガヤとにぎやかに。今年も無事に終わって良かった。

（実行委／桃色鰐）

幻の問題作・映画『叛軍No.4』の上映とトーク

「ピープルズプラン」八〇号（二〇一八年五月、ピープルズプラン研究所）の特集「再考『1968』」をめぐり、ピープルズプラン研究所で三回に亘りシンポジウムが行われた。去る八月一八日、最終回を飾るシンポジウムは一九七二年制作された映画『叛軍No.4』（監督・岩佐寿弥、製作・映画「叛軍」制作集団）を上映し、その後、出演者である和田周さんと小野沢稔彦の対談が行われた。映画上演の前に、この映画製作を触発させた事件、六九年の自衛隊兵士の反乱（小西誠三曹の基地内ビラ撒き、治安出動訓練拒否そして逮捕拒否）についての概略の報告が筆者から行われた。

この映画はある意味で圧巻だ。映画製作側が東京大学駒場の学内で、反軍兵士の講演会の案内ビラを撒き、学生聴衆を集め、学生を聴衆として元皇軍兵士が軍隊内でどのように抑圧されたか、旧軍内でどのように反抗したのか、を一時間以上に亘り語り続けた姿を映像化したものである。当時東大全共闘の最首悟さんの司会で元兵士の講演がはじまった。語る姿そのもののみの映像。その元兵士の姿の勇ましさとたじろぎ、言葉の強さと幾分漏れる言葉の不鮮明さ、いかにも一人の個人として、巨大な軍に抗した姿であった。しかし、この映画の虚構は、暴かれる。映画の後半、一室で酒に酔いながら元兵士を詰問する最首悟さんの姿とそれにこたえる元兵士のもどかしい言葉、姿である。そして元兵士が四五年の終戦時、二〇歳代であれば上演時は四〇代以上の年齢のはず。元兵士が三〇代前半と思える姿は、この映画の虚構を表している。

しかし、この虚構は、六九年の小西誠三曹の反軍の行動を、一人の人間がどのように受けとめるか。映画の主演者である和田周さんは、元皇軍兵士の軍隊内生活を聞きそれを自分自身の中で、創造した。当時の「反軍」の立場の党派から批判を受けたと、小野沢さんはいう。彼らはしょせん政治主義なのだ。軍隊にたいする「反軍」あるいは「叛軍」は、一人一人の人間の態度として表れる。このことを突き詰めなければ「反軍」、「叛軍」などはありえない。今に続く六〇年代後半の思想のありかたを考え直した。

（市民の意見30の会・東京／有馬保彦）

「元号いらない」の声、新宿アルタ前に響き渡る

八月一九日、〈元号はいらない署名運動〉に集まる首都圏の友人たちと、新宿アルタ前で情宣と署名行動をおこなった。灼熱コンクリート地獄を覚悟しながらも少しは涼しさを求めて夕方からの行動。珍しく当日は三〇度を切り、夕方からの行動は思いのほか快適（?）だった。

天皇の代替わり状況に対して反天皇制の立場から声を上げていこうと、昨年春くらいから、首都圏枠の緩やかなネットワークがつくられてきた。このネットワークはこれまでにも、集会実行委をつくっては集会やデモを呼びかけたりしてきた。〈元号いらない署名運動〉もそのネットワークが呼びかけて始まった運動だ。いまでは全国で多くの人たちが署名集めに参加している。集約先に届けられる署名は、個人、小さなグループ、労働組合、宗教者と、掲げられている課題も実に多彩な人たちからで、地域的にも北海道から沖縄まで拡がっている。現在集まった署名は五〇〇〇筆を越したところ。よく集まっていると思うが、でも目標は一万筆。先はなかなかに遠いのだ。

というわけで、新宿情宣とあいなった。署名を集めることもさることながら、なぜ元号に反対するのかを道行く人たちに伝えることが大きな目的の一つ。参加者はみな熱のこもったスピーチをそれぞれに展開し、らっぱさんの歌「元号やめよう」も新宿アルタ前に響き渡った。しばらくすると、通りの反対側からビルに隠れてこちらの様子を伺う公安警察の姿も……。すかさず"Police on my back"（The Clash）のカバーソングも。みんな大喜び。

署名は一一月一五日が最終集約日だ。それまでに何とか一万筆を集め、署名提出行動自体もメッセージ性の強い行動にしていこうと相談中。集約最終日までと二ヶ月だ。さらなる署名への協力、署名運動への参加を呼びかけたい。ちなみに新宿で集まった署名は二〇弱……。まだ署名していないなあ、と思っているみなさま、一筆分だけでもかまいません、署名をして送り返してください。

（大子）

「憲法と天皇制」練馬の会学習会

八月二四日、「アキヒト退位・ナルヒト即位問題を考える練馬の会」の学習会が開催された。六月二五日の第一回（既報）に続いて二回目である。今回は、憲法学の清水雅彦さん（日本体育大学教員）に「憲法と天皇制」と題して話していただいた。

清水さんの話は、まず最初に憲法の成立史から憲法論の基本概念について説明。統治が主権を持つ天皇に総攬され、実質的に権力の分立がなされていない外見的立憲主義と、国民主権から人権を保障し、国家権力を縛ることを目的とする近代立憲主義の理念を強調した。さらに、現代の立憲主義は、ナチズムへの反省からポピュリズム的な「多数派の暴走」を制約し、積極的に違憲審査制度を運用するべきと述べられた。

これらを前提に、議論は「憲法と天皇制」という中心テーマに。清水さんは「将来的には第一章を廃止」「天皇制は廃止するべき」という立場を鮮明にしながら、天皇条項さらに日本国憲法の制定過程と、上諭、前文の構造を説明し、現憲法が民主主義的観点からは不完全で封建的遺物を残すものと断じた。学校の体育教員をめざす学生たちに向けて批判的に講義されている「君が代」「日の丸」や「元号」「祝日」などの検証・歴史教育の一端が、ユーモアを交えた明快な口調と表現で語られていった。

話はさらに展開し、天皇明仁によるビデオメッセージの問題点について。この内容が「天皇制を永続させる」ための強い意思に基づく明らかな政治的発言であり、公的行為を拡大解釈するものであると批判。この発言を後追いで固定化させていった「退位等に関する皇室典範特例法」は、天皇発言を合憲化し、批判的立場を無視して強制するものであるということや、戦没者追悼式での明仁の発言は、裕仁の戦争責任も、戦後のアメリカへの戦争加担とともにあった「平和」の問題点をもないまぜにするものであることが指摘され、最後に自民党の改憲案に対する批判が展開されるなど、網羅的で親切な講演だった。

会場周辺には早い時間から二名の右翼団体の構成員が登場し、トラメを使用し

て街宣を実施。今回の会場は住宅地の真ん中で、この騒音に住民からの苦情もなされていたが、一〇名ほどの公安警察官は遠巻きにするだけだった。小規模な学習会すら圧殺されかねないこうした状況に、なんとか反撃していきたい。

次回は一〇月二五日、立川自衛隊監視テント村の井上森さんを講師として開催する。今回の参加者は四四名だった。

（蝙蝠）

反天日誌

8月11日（土）●埋めるな！辺野古　沖縄県民大会に呼応する首都圏大行動

●平和の灯を！ヤスクニの闇へ　第13回2018キャンドル行動（集会の真相参照）

●日本帝国主義一五〇年を沖縄から問う（集会の真相参照）

8月15日（水）●「明治150年」天皇制と近代植民地主義を考える8・15行動（集会の真相参照）

8月16日（木）・17日（金）●辺野古の海を土砂で埋めるな！防衛省前行動

8月18日（土）●再考「1968」・III映画『叛軍No.4』の上映とトーク（集会の真相参照）

8月19日（日）●やめよう元号　新宿情宣・署名行動（集会の真相参照）

8月24日（金）●練馬学習会　憲法と天皇制（集会の真相参照）

8月25日（土）●連続講座　安倍改憲と憲法9条第1回　9条解釈の政治史と日米安保

9月1日（土）●東海第二原発再稼働STOP茨城県大集会

集会情報 INFORMATION

開催中～2019年2月17日●日本人「慰安婦」の沈黙

13時～18時（月・火・休日休館）／WAM・女たちの戦争と平和資料館（地下鉄早稲田駅ほか）／連絡先：同館（03-3202-4633）

9月8日（土）●オリンピックは誰のため？何のため？　過去の映像が私たちに語りかけること　第1回

12時30分開場・13時開始／武蔵大学8号館6F（西武池袋線江古田駅ほか）／永田浩三、谷口源太郎、天野恵一／主催：「オリンピック災害」おことわり連絡会（080-5052-0270）

●全都反弾圧集会

16時・大久保地域センター（地下鉄東新宿駅ほか）／集会後、渋谷に移動してデモ／主催：同闘争実行委員会

9月9日（日）●南北、米朝首脳会談と東アジアの平和　問われる米軍基地

13時30分開場／池袋IKE.Biz（としま産業振興プラザ）（JRほか池袋駅

［学習会報告］

村上重良『天皇制国家と宗教』

（日本評論社、一九八六年、講談社学術文庫）

本書は国家神道をめぐる手堅い通史だ。この本を「日本型政教分離」とそれを支える「皇室祭祀」について絞って報告した。「日本型政教分離」というのは、村上ではなく、別の論者の言い方なのだが、明治維新直後の神祇官復活に見られる神道国教化政策から、キリスト教容認への転換を経て、島地黙雷らの「信教の自由」論を繰り込んで成立したもの。それは、「全国民への神社崇敬の強制と信教の自由の矛盾」という状況を、「神社神道は宗教ではなく、一般の宗教とは次元を異にする超宗教の国家祭祀である」という論理で越えようとするものだった。その結果、「神道界は……宗教化の路線を完封し、祭祀と宗教の分離による国家神道への確立へと大きく歩み」出すことになった。

皇室祭祀の方は、近代以前の天皇家自身が神仏習合であったから、「宮中の神仏分離」が必要とされるとともに、前例のない天皇の伊勢神宮参拝や、宮中三殿の整備、さまざまな皇室祭祀が集中的に新定・整備され、全国の神社の祭りも皇室祭祀を基準にして再編成され、学校行事を通じた祭日の儀礼などによって、「国民生活」をも律していったことなどについて確認した。

この二点に報告を絞ったのは、それが今なお持続している問題だと思うからだ。本書は、戦後に関する論述は少ないが、神道指令と日本国憲法の公布によって、「宗教は、基本的に国民ひとりひとりの内面にかかわる私事として位置付けられ」たと整理する。しかし、国家神道と神社神道を切り離して後者を宗教法人にスライドしてしまったことと、皇室祭祀が天皇の「私事」として生き延びてしまったことはパラレルの関係にあるのではないか。それが、制度としての「政教分離」を侵食してしまう余地を残したとは言えないか。「日本型政教分離」は曖昧に延命しているのではないか。天皇主義右派勢力としての神社本庁の政治性、習俗論、象徴的行為としての皇室祭祀などは、今の私たちにとっても重要な問題であり続けている。

初めての学習会参加者も含めて、議論は活発に行われた。村上の宗教学における宗教進化論的傾き。政教分離違反という切り口で天皇制の儀礼を撃つことは有効か。日本型政教分離という以前の問題として、日本型「宗教」の特異性についても議論が必要ではないか。明治維新のイデオロギーとしての国体論の位置をどう考えるか、などなど。

次回（九月二五日）は、安丸良夫『近代天皇像の形成』（岩波書店）を読む。

（北野誉）

南口）／乗松聡子、文泰勝／主催：琉球沖縄シンポジウム実行委員会（090-2466-5184 矢野）

9月11日（火）●持つな！「敵基地攻撃力」学習討論集会
18時開場・18時30分開始／文京区民センター3B（地下鉄春日駅ほか）／吉沢弘志、木元茂夫、横山哲也／主催：大軍拡・基地強化NO！アクション2018（03-3961-0212 北部労働者法律センター）

●脱原発テントひろば記念集会
18時開始／経産省本館正門前（地下鉄霞ヶ関駅ほか）／鎌田慧、吉原毅ほか／主催：経産省前テントひろば（070-6473-1947）

9月13日（木）●原発被ばく労災あらかぶさん損賠訴訟第9回口頭弁論
14時開廷・東京地方裁判所103号法廷（地下鉄霞ヶ関駅）

9月15日（日）●「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第7回　東京オリンピックと「生前退位」
14時30分開場・15時開始／ピープルズ・プラン研究所（地下鉄江戸川橋駅ほか）／小倉利丸、宮崎俊郎、天野恵一／主催：ピープルズ・プラン研究所（03-6424-5748）

●朝鮮敵視政策を改め日朝国交交渉の再開を！9・15集会
18時開場／文京区民センター3A（地下鉄春日駅ほか）／高野孟、朴金優綺／主催：同集会実行委員会（連絡先：日韓民衆連帯全国ネットワーク070-6997-2546）ほか

9月16日（日）●オリンピックは誰のため？何のため？　過去の映像が私たちに語りかけること　第2回
12時30分開場・13時開始／武蔵大学1号館地下（西武池袋線江古田駅ほか）／永田浩三、谷口源太郎、天野恵一／主催：「オリンピック災害」おことわり連絡会（080-5052-0270）

●被ばく労働者の現状と労働者の権利
13時開場／連合会館402（JR御茶ノ水駅ほか）／片山夏子ほか／主催：被ばく労働を考えるネットワーク（090-6477-9358 中村）

9月17日（月・休）●フクシマと共にさようなら原発全国集会
12時30分開場／代々木公園B地区（JR原宿駅ほか）／主催：「さようなら原発」一千万署名市民の会

9月18日（火）●大軍拡・基地強化NO！アクション2018・防衛省申し入れ行動
18時30分防衛省前集合／主催：同アクション（03-3961-0212 北部労働者法律センター）

9月20日（木）●生前退位、何が問題か「道徳」教育に潜むもの！
18時30分／横浜市開港記念会館6号室（みなとみらい線日本大通り駅ほか）／北村小夜／共催：日本基督教団神奈川教区社会委員会ヤスクニ・天皇制問題小委員会ほか（090-3909-9657）

9月26日（水）●警視庁機動隊の沖縄への派遣は違法　住民訴訟第9回口頭弁論
11時30分開廷・東京地方裁判所103号法廷（地下鉄霞ヶ関駅）

9月27日（木）●天皇代替わりと民主主義の危機
18時開場・18時30分開始／エルおおさか南館ホール（地下鉄京阪天満橋駅）／横田耕一／主催：天皇代替わりに異議あり！関西連絡会（090-5166-1251 寺田）

9月29日（土）●立川「防災航空祭」反対デモ
10時30分集合・11時デモ出発／立川憩いの場（JR立川駅北口）／主催：立川自衛隊監視テント村（042-525-9036）

●集会・デモくらい自由にやらせろ！
デモ・15時集合・アルタ前（JRほか新宿駅）／集会・17時・日本キリスト教会館4F（地下鉄早稲田駅）／鵜飼哲／主催：同実行委員会（03-5577-6705 争団連気付）

9月29日（土）・30日（日）／10月6日（土）～8日（月・休）●野戦の月公演「二つ三つのイーハトーブ物語第一部 堂々たるデク」
17時30分開場／9月：隅田公園山谷堀広場（地下鉄浅草駅）・10月：矢川公園（JR矢川駅）／予約・問い合わせ：090-8048-4548

9月30日（日）●「慰安婦」被害はどう聞き取られてきたか
13時開場・13時30分開始／在日本韓国YMCA9F（JR水道橋駅ほか）／梁鉉娥、川田文子、小野沢あかね、大門正克、金富子／主催：VAWW-RAC（連絡先：03-3818-5903）

●未来からの透視 ロシア革命百年第4回
14時／柴中会公会堂（JR立川駅）／太田昌国／主催：シビル（042-524-9014）

10月8日（月・休）●練馬観閲式反対集会&デモ
10時集会・12時15分デモ出発／練馬勤労福祉会館（西武池袋線大泉学園駅）／大内要三、横山哲也／主催：同実行委員会（03-3993-5405 練馬区職労）

●1964→2020 スポーツ（活動）の主役は誰か
13時15分開場／豊洲シビックセンター（ゆりかもめ線豊洲駅）／谷口源太郎／主催：「オリンピック災害」おことわり連絡会（080-5052-0270）

10月14日（日）●観閲式反対デモ
10時／朝霞駅南口（東上線朝霞駅）／主催：同実行委員会（有事立法・治安弾圧を許すな！北部集会実行委員会 03-3961-0212 ほか）

10月25日（木）●派兵時代の天皇制
18時40分開場／練馬区厚生文化会館（西武池袋線練馬駅ほか）／井上森／主催：アキヒト退位・ナルヒト即位問題を考える練馬の会（090-5208-5803 池田）

神田川

●先月に引き続き増ページ。皇室や政治の動き。オリンピック関連もたくさんあるし、それに伴い運動も盛りだくさん！
●この間、配達会社の都合でニュースの配達が遅くなっているとご連絡をいただいています。ごめんなさい！（黒豹）